

約1年ぶりの投稿のきっかけは、南米最南端のフエゴ諸島に住んでいたクリスティナ・カルデロンという93歳のチリ人女性の死亡記事を目にしたことです。その土地のヤーガン語の最後の話者だった彼女の死は、一つの言語の消滅を意味したのです。

3千とも7千とも言われる世界の言語の多くが、悲しいことに消滅の危機にあるとされます。ユネスコは、消滅の危険度ごとに区分したリストを公表していますが、「最も深刻」としてランクされている言語の一つがアイヌ語です。かつて北海道はもちろん、東北地方や千島(ちしま)、樺太(からふと)でも話され、現在も「知床(しれとこ)」や「苦小牧(とまこまい)」など独特の地名に名残をとどめるものの、すでに話者が1桁しか生存しておらず、消滅が目前に迫っています。

言語の保存と再生が民族の大事業とされることもあります。アイルランドでは、ケルト民族の言語であるアイルランド語(ゲール語)を英語と並ぶ公用語とし、話者に様々な優遇措置を与えています。また、現在のイスラエルの公用語であるヘブライ語は、いったん消滅した古代ヘブライ語を必死の努力で千数百年ぶりに復活させたものです。

一方で、私たちの国語について「乱れ」が指摘されることがあります。俗語や流行語を嫌う人は決して少なくありませんし、「見れる」「食べれる」などの「ら抜き言葉」が「正解」となるのはまだ先のことでしょう。しかし、絶え間ない変化は、言葉が「生きている」ことの証(あかし)とも言えます。

私たちの使う日本語は始めは乳児期に親世代から口伝えに教わり、親世代もまたその親から承継したものです。当然、2世代か3世代の間の意思疎通に何の支障ありません。しかし、例えば、1300年前の奈良時代の言葉となると、意味も表記も発音も、専門的に研究しなければ理解できません。鎖の一つひとつはほぼ同じものつながりでも、遠く遡(さかのぼ)った先にあるのは完全に異質な姿なのです。

生きている日本語は、これからも目新しい語彙や新鮮な表現への置き換わりを繰り返し、未知の言葉へと変化していくのでしょう。